令和3(2021)年度 研究拠点形成事業 実施報告書　　様式７
（公開）

１．日本側参加研究者の体制

①採択年度（和暦）（西暦）	平成29 2017	年度	②採択期間（通常A型は5年以内 B型は3年以内）	5	年間（1年未満は切上げ）	③事業の型（AまたはBを記入）	A 型

④日本側拠点機関名（和文）	名古屋大学
⑤研究交流課題名（和文）	テクスト学による宗教文化遺産の普遍的価値組成学術共同体の構築
⑥課題番号	JSPSCCA20170001
⑦コーディネーター所属部局名・職名・氏名（和文）	高等研究院　客員教授　阿部泰郎

⑧日本側協力機関名（和文）（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館・国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター・東京大学・南山大学宗教文化研究所・慶應義塾大学斯道文庫・金沢大学・早稲田大学・龍谷大学

⑨参加研究者数内訳（様式12 参加研究者リストに準じてください。重複カウントしないこと。）	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	参加資格のない者（⑩に内訳をご記入ください。手引き２－４参照。）	合計	第三国所属の研究者（内数）（⑪に内訳をご記入ください。）
拠点機関	5	1	3	0	0	9	0
協力機関・協力研究者	42	19	9	1	1	72	1
合計	47	20	12	1	1	81	1

⑩手引2－4記載の参加資格のない者の内訳（適宜、行を加除。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

所属・職	専門分野	研究交流での役割
東洋大学文学部非常勤講師	民俗学・地域文献学	R4の共同研究の為の国立歴史民俗博物館による会津地方所在宗教文化遺産調査報告の責任者

⑪「第三国所属の研究者」内訳　（５名迄。適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	日本側参加者として一体的な協力体制を確保する方法
台湾・台湾国立大学・准教授	日本思想史	台湾大所蔵の日本宗教文献の遺産化	主にメールを通じて協力体制を確保する

２．経費

事業の型　A　型			
①当該年度の本事業による経費の支出			
経費内訳		金　額　（単位：円）	備　考
研究交流経費	国内旅費※1	410,160	
	外国旅費※１	4,755,570	
	謝金	0	
	備品・消耗品購入費	1,368,643	
	その他経費	5,961,937	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税 ※２	547,570	
	計	13,043,880	
業務委託手数料		1,304,388	研究交流経費の10%（１円未満切捨）。 消費税額は内額とする。
合計		14,348,268	

※１「国内旅費」「外国旅費」の合計が、研究交流経費支出額の50%を超えていない場合、備考欄にエラーが出ます。
※２受託機関における課税、非課税（免税）の区分に応じ対象額を算定のこと。受託機関で負担の場合はその旨、備考欄に記載すること。

②研究交流経費（総額）の30%に相当する額を超える各経費費目の増減があった場合の説明事由（該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）。

該当なし

③本事業経費による日本側参加研究者の旅費			
日本側参加研究者のうち、所属機関が日本である者の旅費の総額（単位：千円）		5,165	
日本側参加研究者のうち、所属機関が日本以外である者の旅費の総額（単位：千円）		日本→日本以外の渡航	0
		日本以外→日本の渡航	0
		日本以外→日本以外の渡航	0

④（B型のみ）本事業経費による相手国側参加研究者の旅費の総額（単位：千円）（千円未満切捨て）			左記のうち、第三国所属の相手国側参加研究者の旅費の総額（単位：千円）（千円未満切捨て）		
	日本又は相手国→日本の渡航	0		日本又は相手国→日本の渡航	0
	日本又は相手国→相手国の渡航	0		日本又は相手国→相手国の渡航	0
	日本又は相手国→第三国の渡航	0		日本又は相手国→第三国の渡航	0
	第三国→日本の渡航	0		第三国→日本の渡航	0
	第三国→相手国の渡航	0		第三国→相手国の渡航	0
	第三国→第三国の渡航	0		第三国→第三国の渡航	0

※旅費は、往復の金額で記載すること（例：第三国から日本に渡航の場合、第三国→日本→第三国の往復の渡航費を「第三国→日本の渡航」の欄に記載）。
　経由国がある場合は、日本側拠点機関の規定等に基づき、旅費の分類・切り分けを行い、記入すること。

⑤（B型で平成31年度採択課題のみ）中国・韓国・シンガポール・台湾側参加者の外国旅費がある場合
（交流経費の５％以内。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

総額（単位：千円）	手引２－６記載の要件を満たす旨の事由説明
0	該当なし

⑥相手国マッチングファンド(=相手国側拠点機関が本研究課題に使用した研究交流経費)（単位：千円、千円未満切捨て）

全相手国のマッチングファンド総額（１年間の金額）	マッチングファンドのある相手国拠点機関数	相手国拠点機関のマッチングファンド平均額（１年間の金額）
5,149	3	1,716

３．共同研究・セミナー

事業の型　A　型							
①共同研究（適宜、行を加除すること。）		現在の年度に○を付けること→					○
共同研究整理番号	共同研究課題名（和文）	相手国	1年目 実施年度に○を付ける↓	2年目 実施年度に○を付ける↓	3年目 実施年度に○を付ける↓	A型のみ 4年目 実施年度に○を付ける↓	A型のみ 5年目 実施年度に○を付ける↓
R１	境界と越境のテクスト文化遺産	フランス・ドイツ・米国	○	○	○	○	○
R２	宗教文化遺産としての論議と宗論テクスト	フランス	○	○	○	○	○
R３	像内納入宗教文化遺産の比較研究	米国		○	○	○	○
R４	宗教写本学による国際宗教文献遺産の創成	ドイツ			○	○	○

共同研究の実施状況（当該年度実施の共同研究について、共同研究整理番号毎に、特筆すべき成果、相手国側拠点機関との主体的な取り組み及び今後の研究への波及効果、研究協力体制の構築状況等について記載すること。また、手引5－3変更事例No.2にあたる変更の場合は、変更事由も記載すること。）

R1	「境界と越境のテクスト文化遺産」。本拠点形成事業の中核となる本共同研究は、相手国研究代表者のハルオ・シラネ教授と聚密に協議しつつ、協会と越境の文文化遺産の研究対象を、中世日本の東国(鎌倉)から伊豆・箱根・富士山へと展開させ、日本全体の国土を視野に入れ、歴史的な時間軸も先史・古代から現在まで拡大して、日本列島の海と山を舞台に神仏とその神話伝承の世界を生み出した宗教テクスト文化遺産の多角的な共同研究へと発展させた。これには名古屋大学CHTと静岡県富士山世界遺産センターの協働が大きな支えとなった。20年3月にセンターが予定した国際学会はコロナ禍で中止されたが、その企画は継続発展して22年10月にコロンビア大学でのセミナーとして実現し、この間に多くの研究成果が『富士山学』をはじめとして蓄積された。更に代表者のシラネ教授は、22年に日本学士院客員教授に就任、同年に東京大学の特命教授として日本において滞在・活動中に、本共同研究のためのフィールドワークを研究代表者と全国各地で行い、最終的に本研究の総括研究集会で「環境人文学」の新たな今後の研究指針を提唱した。これは長期にわたるテクスト学による宗教文化遺産に関わる多面的な共同研究を基盤として、その研究交流が生み出した特筆すべき将来への世界的な研究提案として、今後の人文学に限らず文理諸学・自然科学との連携と波及効果を喚起する、テクスト学の可能性を拓く方向であるといえる。なお、この過程では、日米双方の多数の大学および公私の研究機関と美術館・博物館、そして寺社の、宗教文化遺産に関わり、所蔵・伝承する各機関・個人との協力体制と信頼関係が築かれ、多くの成果が公刊・報告されたことも銘記したい。
R2	「宗教文化遺産としての論義と宗論テクスト」。もうひとつの中核的拠点研究として、相手国研究代表者のジャン=ノエル・ロベール教授の普遍的宗教テクスト論と言うべき「聖語論」と相乗的な共同研究を行い、また、その基盤を支える宗教テクスト文化遺産の探査と共有を推進するため、日本仏教における論義と宗論の総合的な研究を組織したが、その上で更に重要な研究の焦点となったのが、ロベール教授によって日本のダンテとも評された天台僧慈円(1155~1225)であった。新たに組織した「学僧慈円」研究会は、21年度中に三度のオンライン研究会を開催し、参加者の課題と研究成果を共有したが、それらは従来までの慈円研究で蓄積された著作文献を前提をするものであり、それを更新し、ブレイク・スルーを喚起する基盤的な慈円の宗教テクスト調査研究が求められた。この間、東京大学史料編纂所と共同して慈円著作聖教を多く蔵する青蓮院吉水蔵の調査が龍谷大学の協力によって実現し、CHTにより継続して行われた、編纂所藏の吉水蔵マイクロ画像データによる解読の成果として、多数の新発見慈円著作が確認された。本拠点形成研究期間においてJSPSの助成により行われた調査研究により、これらの新出慈円著作十五点は、解題と翻刻本文を添えた資料集として『慈円著作聖教類纂』として編まれて、2023年2月にコレージュ・ド・フランスの『学僧慈円』研究セミナー席上でロベール教授はじめ参加者一同に披露された。この画期的な成果は、概要と一覧が史料編纂所『紀要』に紹介されているが、所蔵者の青蓮院門跡のご理解を得て、学術資料として資料集データの学会共有・公開を御許可戴くことが叶った。今後、この調査を端緒とした吉水蔵聖教アーカイヴのデジタル化が進展しそのデータ公開が実現すれば、知の巨人としての慈円の宗教思想の解明に限らず、密教を中心とした宗教思想文献全般の研究が国際的に大きく進展し、この分野で最も先端的な研究成果を生み出す拠点となる可能性があり、既に吉水蔵を中心として、名古屋大学CHTと東大史料編纂所と龍谷大学世界仏教文化研究センターの三者で、コレージュ・ド・フランス日本高等研究所を介した研究協力体制の構築が始まっている。なお、これまでの研究成果は、慈円の八百年忌を迎える2025年に、日仏双方で『学僧慈円』論集を編纂・刊行する計画が決定している。
R3	「像内納入宗教文化遺産の比較研究」。本研究の中心的な対象である、ハーバード美術館蔵「聖徳太子二歳像」は、いわゆる南無仏太子像として現在知られる最古(1292年)の作例である。この像は優作であるばかりでなく、像内から膨大な納入品が発見されており、その全体が貴重な諸位相の宗教テクストのアーカイヴであって、研究による解読と解釈を待っている。ハーバード大学・美術館との、本拠点研究の全期間を通しての共同研究は、2019年の美術館における「聖徳太子像一内なる神秘」展に中間的な成果が示され、日本側からも公開学術セミナーに参加報告と資料提供を行ったが、その本格的な進展と成果の結集はむしろその後に名古屋大学CHTセンターで推進され、2022年秋のハーバード美術館での編集会議を経て、ハーバード側の、本像と像内納入品について紹介した最初期の研究と最新の調査研究成果の翻訳と、日本側の特に像内納入宗教テクストの最先端の研究成果を総合し、すべての納入品の宗教テクストの文脈を解釈した全体的な研究として、期間内に、日米共同編集による研究資料論集『ハーバード美術館 南無仏太子像の研究』(2023年3月)が公刊された。本書において解明された、この最古の南無仏太子像造立の背景には、西大寺叡尊(1201-90)の影響の許で、その周囲の尼僧たちを中心とした、おそらく朝廷周辺の社会集団によって、彼により高揚した太子信仰の象徴として造立された消息がテクストそのものから語りかけてくる。この中世日本の“文化的記憶”の記念としての南無仏太子像誕生を読み解く、特筆すべき成果は、ハーバード大学のアジア日本研究の拠点であるイエンチン研究所(およびライシャワー・センター)と名古屋大学CHTを中軸とする諸機関、とりわけ米国の主要な美術館ネットワークとの結び付きの元で生み出されたものである。それは同時に、CHTがJSPSグローバル展開プログラム「絵ものがたりメディア文化遺産の探求と発信」(2017-19)によって遂行した日本の絵巻・絵本を対象とする若手研究者中心の共同研究と調査との相乗的な達成と相まって、現在、AASやEAJSなど国際的な学会への積極的な挑戦・参画を通じて新たな交流の輪を広げている。

R4	「国際宗教文献遺産の創成」。本研究は、ドイツ側コーディネーターがベルリン自由大学で主宰するSFBの、古代エジプト・オリエントとアジア(韓国)にわたる知の交流を探求する大型研究と、ハンブルク大学が国際写本学研究センターを拠点として展開する、日本を含む世界各地の写本文化の遺産を科学的に解明する宗教写本学を、名古屋大学CHTが、古代地中海世界の碑文や古典、中世西欧の装飾写本、中央アジア・中国の敦煌写本、そして日本中世寺院の聖教などの分野での先端的な研究から、有機的に連携して、それらに共通する普遍的な特質を比較することができる研究基盤を構築することを大きな目標とするものである。 この計画は、端緒となる相互交流の段階でコロナ禍により中断を余儀なくされたが、実施のための準備段階のワークショップや、その実験的試みとしてオーストリア科学アカデミーとの西欧修道院アーカイヴズと日本中世寺院アーカイヴズとの比較ワークショップや、韓国書院文化の藏版アーカイヴズと宮廷蔵書アーカイヴズとの研究交流を重ねることで、本格的な長期にわたる宗教テクスト・アーカイヴズ文化遺産研究ネットワークを目指す端緒が生まれたことは意義深い。また、各研究機関が自己資金で相互に若手研究者を招聘、留学により派遣して、各自の専門分野の宗教写本や出土遺物の調査研究に従事し、各自のフィールドにおける調査対象として各種の宗教テクストや、アーカイヴスそれ自体を探査し解読・復原するアーカイヴス化を進展させている。その中で特筆すべき成果が名古屋大学CHTによる、日本中世寺院における「聖教」宗教テクストのフロンティア的な新分野の発見と本格的な紹介・研究である。真福寺大須文庫を中心とする禅と密教が融合した“中世禅”の世界を解明した、『中世禅籍叢刊』(全12巻、2018)と別巻論集『中世禅の新視角』(2019)は、仏教史の全面的な書き換えを文献自体が迫るものである。更に、地方からも奥会津の全域から中・近世の転換期に形成された真言寺院の聖教群が発見・確認されたが、この書写者である学僧祐俊の、神皇正統記を含む密教聖教は、智積院二世祐宜(1545-1612)の著作と収集書に緊密に関わり、中世根来寺を中心とする全国的な写本を介した知のネットワークの所産であり、その概要と報告が『奥会津真言寺院宗教テクスト文化遺産資料集』)2021)として編まれ、学界に提供された。

②セミナー（当該年度開催分について、記載。適宜、行を加除すること。）

セミナー整理番号	セミナー名（和文）※振興会名及び本事業名を明記すること。シンボルマーク等で代用した場合、その旨コメントにて記載すること。英文も同様。	セミナー名（英文）	開催地（国名・都市名・会場名）	開催期間（○年○月○日～○年○月○日（○日間））
S 1	日本学術振興会研究拠点形成事業「富士山の宗教文化遺産化とそのテクスト」	“Mountains, Seas, Gods, and Crossing Borders: Metamorphosis, Interspecies Marriage, and Travel to Other Worlds in Medieval Japan”	アメリカ・ニューヨーク・コロンビア大学	2022年10月14日～15日（2日間）
S 2	日本学術振興会研究拠点形成事業「テクスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」	Construction of an academic community for universal value creation of religious and cultural heritage through textology	オンライン開催（名古屋・名古屋大学）	2023年3月28日
S 3	日本学術振興会研究拠点形成事業「宗教的身体と産生育のテクスト遺産・自然と救済を詠じる聖たちの宗教史(EAJS/パネル開催)	Textual Heritage of Religious Body and Birth/Religious History of Saints Reciting Nature and Salvation	オンライン開催（ベルギー・ゲント・ゲント大学）	2021年8月24日～2021年8月28日(5日間)
S 4	日本学術振興会研究拠点形成事業「学僧慈円とその宗教遺産」	Jien(1155-1225）Moin,poète,historien,politicien	オンライン開催（フランス・パリ・コレージュ・ド・フランス）	2021年6月12日 2021年10月9日 2021年10月30日 2023年2月18日
S 5	日本学術振興会拠点形成事業「宗教文化遺産としてのアーカイヴス」	Archives as Religious and Cultural Heritage	フランス・パリ・コレージュ・ド・フランス	2023年2月21日
S 6	日本学術振興会研究拠点形成事業「宗教文化遺産としての納入品と写本マテリアリティの遺産学」	Inheritance Studies of Deliverables and Manuscript Materiality as Religious and Cultural Heritage	アメリカ・ボストン・ハーバード大学	2022年10月10日～11日（2日間）

セミナーの開催状況（当該年度開催のセミナーについて、セミナー整理番号毎に、参加者数（総数、参加国名ごとの参加人数（本事業経費による負担の有無を問わない）、交流を通じて得られた研究成果の発表・評価・とりまとめの状況、相手国とのネットワーク形成、若手の育成等の効果等について記載すること。また、手引5－3「軽微な変更の事例」の変更事項No. 2 にあたる変更の場合は、変更事由も記載すること。）

S1

コロンビア大学との共同研究R1を更に発展させて、富士山を焦点としながら日本の国土全体を対象に、神話から現在も繰り返される災害の問題も視野に入れて、世界との比較という普遍性への回路を探るという目的で開催されたワークショップは、日本側から4名の参加者が、研究代表者の報告・話題提供によるディスカッションと、報告者の「富士山絵伝」の絵解きプレゼンテーションによる課題の可視化を試みた。コロンビア側は、相手側代表者のシラネ教授による司会進行と質問に加えて、モアーマン教授による富士山起請文の報告と20名の会場参加者による質疑・コメントによって活性化した。翌日は、同じ会場で、シラネ教授による研究代表者への単独インタビュー(座談会)が行われ、前日のワークショップの課題やトピックを更に掘り下げ、かつその背景をなす文脈(コンテクスト)が詳細に問いかけられ、これに答えて文化遺産研究の可能性を共有した。このインタビューは収録され、コロンビア大学で編集公開される予定である。

このワークショップの前後には、前回(2018)のコロンビア大学での国際研究集会に参加、報告した若手研究者が、相互に相手国を訪問し研究を深め、また著書を上梓する為の滞在プログラムを実現している。これらの成果に結実する契機を、このワークショップ・共同研究が生み出していることを特記しておきたい。

S2

五年間(コロナ禍での延長を含めて六年間)にわたるCore to Coreプログラムの国際共同研究の全体的な成果報告を、相手国側の研究代表者を含めて、オンライン方式で参加・視聴することができる総括国際研究集会を、名古屋大学高等研究院との共催により、高等研究院談話室からユーチューブ配信により同時中継した。この報告者として、相手国側の代表者は、日本滞在中のコロンビア大学のハルネ・シラネ教授が直接対面参加され、コレージュ・ド・フランスのジャン=ノエル・ロベール教授はオンラインで参加いただいた。全体の趣旨・成果報告は研究代表者がつとめ、R1、R2、R3の成果を二人の代表者と共に報告した。R4は周藤教授が報告し、全体を早稲田大学高度研究所の山本聡美副所長がコメントされ、最後に木俣CHTセンター長が総括された。これは全体が高度研究院からユーチューブ配信されて、現在も視聴できる。

S3

R2の国際共同研究の一環として継続されてきた、宗教テクストにおいて人間の身体を観念し宗教実践に至る普遍的な課題を、日本宗教を対象として探求する研究グループの報告は、2021年度に行われたEAJSゲント大会において、アンナ・アンドレーワ准教授をチェアーとして研究代表者を含む日本側3名と米国側研究者1名を加えて、パネルを構成し、全てオンライン方式で行われた大会において報告と討議が行われ、世界から48名の参加者が視聴し発言した。本パネルには、日本側の代表者が作成した『宗教的身体テクスト資料集』PDFデータが配信され、胎内五位・出産・成長を全て図示した大須文庫の密教秘伝聖教テクストを含む新出資料を紹介し、学界に提供した。このパネルの、更なる発展的な継承と展開は、2023年夏に再びゲント大学で対面にて開催されるEAJS大会において、新たな米国の若手研究者をメンバーに迎えて行われる予定であり、既に提案は採択されている。

S4
コレージュ・ド・フランスとの共同研究R2は、研究期間の後半は、天台座主で歌人でもあった慈円大僧正をめぐる、その宗教者かつ文芸の著作家としての全体像を総合的に探求する研究会を、仏側の研究代表者ロベール教授を中心に組織し、研究代表者は日本側でその共同研究の基盤を成す、慈円が門主をつとめた青蓮院吉水蔵の慈円著作聖教の確認と解読を担った。研究会はオンライン方式で2021年度に三回開催され、参加者の報告(日本側10名、米国1名、仏国1名)と意見交換が行われ、研究情報も共有されたが、なお多くの課題が残された。何より、この共同研究を通して慈円研究を既成の分野を超え、かつ国際的な普遍性の許で、あらためて進展させる為には、著名な和歌や『愚管抄』のほかに、その中核的な任務の所産であった宗教テクスト(聖教)の全体像が解明され、共有されねばならない。この作業を、東京大学史料編纂所と協力して2015年以来持続してきたが、ようやく全体が見通され、主要な新出著作も解読が進み、何より吉水蔵の所蔵者である青蓮院門主の御理解により、史料編纂所(及び龍谷大学)の調査とデジタル・アーカイヴ化が2022年から開始され、慈円著作の概容も『紀要』に紹介することができた。更に、その本文翻刻を含む資料集『慈円著作聖教類纂』を、本研究を介して広く学界に公開することをも、御門跡が御許可下さった為、本研究期間の最後にあたり、この資料集をコレージュ・ド・フランスにおいて、研究代表者のロベール教授をはじめ、研究者に紹介、提供することができた。
2023年2月18日に、コレージュ・ド・フランスの研究棟セミナー・ルームにて、ロベール教授以下10名の研究者が集い、教授の司会の許で研究代表者の報告と資料集の解説を受けて質疑が行われた。
この後、ロベール教授と教授の提案により2025年にコレージュ・ド・フランスにおいて刊行を予定する、仏語版『学僧慈円』論集の編集について、研究代表者が準備した構成素案にもとづいて打ち合わせがなされ、おおよその方針が定まった。同時に日本側でもその日本語版論文集を刊行することも提案し、合意された。23年度中に研究会を中心に論文を執筆し、24年度中に翻訳、25年度に刊行の予定である。この研究会および日本語論文の翻訳には、日本・米国・フランスの若手研究者が参画し、本論文集は彼らの重要な業績となると同時に、これまでほぼ日本に限定されてきた慈円の本格的な総合研究の成果が、海外の権威ある学術機関からまず公刊されるという、画期的な成果として評価されることになるだろう。
S5
本セミナーは、本来、日本側研究参加者の名古屋大学CHT近本教授の企画された、ベネツイア大学のルペルティ教授との共同開催になる、日本の宗教文化遺産の重要な領域を占める芸能をテーマに、日本とイタリアの研究者・学生によるワークショップ形式で、ベネツイアで行われる、R2の共同研究の一環として第三国で開催されるセミナーであった。日程上、パリで行われるR2の「学僧慈円」研究会と連続して、パリから移動して訪問する予定であったが、23年1月にルペルティ教授が急逝され、急遽R2研究代表者のロベール教授に依頼し、パリ、コレージュ・ド・フランスでの研究会として開催させて頂くことになった。しかし、主催責任者の近本教授も、研究代表者と共に渡仏したパリの滞在先で不慮の病で急逝されたため、報告者の一人でもあった研究代表者が責任者をつとめることとなり、近本教授の報告を代読するほか、ロベール教授および補佐をつとめられたハイエク教授の司会進行の許で、自らの報告をも行うことができた。日本からは、その陰陽道・卜占研究の第一人者であるハイエク教授を研究協力者として宗教伝承研究と民間宗教アーカイヴズ化に取り組む若手研究者を含む、中堅・ベテランの3名が報告者となり、フランスからは、日本の宗教と芸能に関心をもつ若手からベテランまで8名の研究者が参加し、各報告に活発な質疑とコメントが寄せられた。このうち一名の報告は、従来全く知られていなかった慈円の今様(歌謡)を青蓮院吉水蔵の宗教儀礼テクストの中から見いだしたことを検証・確認したもので、その成果は『学僧慈円』論集に収められるべきものである。近本教授こそが本拠点形成の果実を、このような新たな企てを通して今後更に発展させてくれるものと願っていたが、それが叶わず残念至極である。しかるに、その種子はただちに芽吹いて次世代の研究者によって継承・展開されるだろうことをも、一同の悲しみのうちに共有されたことであった。
S6
ハーバード大学との共同研究R3の研究をより展開させるため、名古屋大学とハーバード大学の若手研究者による日本仏教文化遺産と宗教テクストに関連する最先端の研究報告を相互に行い、討議した。日本側からの報告者の一人は、名古屋大学において覚鑁の密教宗教空間の創成に関する新たな分野を開拓した博士論文において、ハーバード大学の阿部龍一教授を副査として学位を取得した若手研究者であり、その後の研究の進展を報告する機会でもあった。またもう一名は、先にグローバル展開プログラムの共同調査において、ハーバード美術館の宗教絵巻を取り上げ、その浄土教絵巻としての特質を研究した成果報告を行い、これまでの共同研究の積み重ねが、若手研究者の育成として結実した達成を示す機会でもあった。翌日は、ハーバード美術館において、本共同研究の中心課題である聖徳太子二歳像(南無仏太子)とその像内納入品をめぐる日米の共同研究の成果とその資料を、研究資料論集としてまず日本側で刊行する学術出版の編集会議を行った。この会議で合意された編集方針にもとづき、帰国後編集作業が行われ、2023年3月に、本研究の成果として『ハーバード美術館南無仏太子像の研究』(中央公論美術史出版、380頁)が公刊された。

③当該年度に第三国でのセミナー開催があった場合の、本事業の位置づけ、第三国で開催する経済的かつ合理的な理由、そして相手国側拠点との開催経費の分担状況
（セミナー整理番号毎に記入すること。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。手引２－７参照のこと。）

該当なし

④該年度に開催のセミナーで、参加研究者以外の者に本事業経費を使って基調講演を依頼した場合の、日本側拠点機関にとってのメリット
（セミナー整理番号毎に記入すること。該当ない場合は「該当なし」と記入すること。手引3－４（１）①参照のこと。）

該当なし

４．研究交流状況

事業の型　A　型　（本シートには、延べ人数で計算した人数を記入すること。）

①日本→海外の渡航数（本事業経費による渡航）（適宜、行を加除すること。）

	国名（派遣先） 第三国は、国名の後に（第三国）と記載すること。	教授級以上	助教・ 准教授等	ポスドク等 若手研究者	大学院生	手引2－4記載の 参加資格のない者・ その他	合計	うち、31日以上の渡航数（該当の場合のみ） 役職ごとの内訳も（　）書きで併記のこと。 記入例：４（教授級以上１、大学院生３）
1	アメリカ	2	1	1	0	0	4	
2	フランス	3	0	1	0	0	4	
3	ドイツ	0	0	0	1	0	1	
計		5	1	2	1	0	9	

第三国への渡航がある場合は、各渡航について、手引3－４（１）①記載の要件を（B型の相手国の第三国の参加研究者の場合は手引２－６記載の要件も）満たす旨の事由説明
（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

②海外→日本の渡航数（本事業経費による渡航）（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

	国名（派遣元） 第三国は、国名の後に（第三国）と記載すること。	教授級以上	助教・ 准教授等	ポスドク等 若手研究者	大学院生	手引2－4記載の 参加資格のない者・ その他	合計	うち、31日以上の渡航数（該当の場合のみ） 役職ごとの内訳も（　）書きで併記のこと。 記入例：４（教授級以上１、大学院生３）
1	該当なし	0	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	0	0	

第三国からの渡航がある場合は、各渡航について、手引3－４（１）①記載の要件を（B型の相手国の第三国の参加研究者の場合は手引２－６記載の要件も）満たす旨の事由説明
（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

③日本以外→日本以外の渡航数（本事業経費による渡航）（①、②の合計数の半数以下とすること。適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

	国名（派遣元）	国名（派遣先）	教授級以上	助教・ 准教授等	ポスドク等 若手研究者	大学院生	手引2－4記載の 参加資格のない 者・その他	合計	うち31日以上の渡航数（該当の場合のみ）役職ごとの内訳も（　）書きで 併記のこと。 記入例：４（教授級以上１、大学院生３）
1	該当なし		0	0	0	0	0	0	
計			0	0	0	0	0	0	

各渡航について、手引3－４（１）①記載の要件を（B型の相手国の第三国の参加研究者の場合は手引２－６記載の要件も）満たす旨の事由説明
※③の合計が①と②の合計の半数よりも大きくなる場合、手引２－７（３）もしくは（４）に該当するセミナー開催に伴う渡航である旨も記載すること。
（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

④海外→日本の渡航数（相手国側経費による渡航）（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

	国名（派遣元）	教授級以上	助教・ 准教授等	ポスドク等 若手研究者	大学院生	手引2－4記載の参加資格のない者・ その他	合計
1	該当なし	1	1	0	0	0	2
計		1	1	0	0	0	2

⑤日本→海外の渡航数（相手国経費による渡航）（適宜、行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）

	国名（派遣先）	教授級以上	助教・ 准教授等	ポスドク等 若手研究者	大学院生	手引2－4記載の参加資格のない者・ その他	合計
1	該当なし	0	0	0	0	0	0
計		0	0	0	0	0	0

5. 交流相手国

事業の型　A　型	
①相手国名（和文）	米国
②拠点機関名（和文および英文）	
和文：コロンビア大学 英文：Colombia　University	
③コーディネーター所属部局名・職名・氏名（英文）	Faculty of East Asia,Professor,Haruo SHIRANE
④協力機関名（和文および英文）（1機関ごとに行を適宜加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）	
和文：ハーバード大学 イエンチン研究所、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 英文：Harvard University Harvard Yenching Institute, Unversity of California Santa Barbara	

⑤参加研究者数内訳(重複カウントしないこと)	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	その他	合計	第三国所属の研究者（内数）
拠点機関	4	0	0	0	0	4	
協力機関・協力研究者	11	2	2	0	0	15	6
合計	15	2	2	0	0	19	

⑥「その他」内訳（該当ない場合は「該当なし」と記入すること。適宜、行を加除すること。）

所属・職名（専門分野）	研究交流での役割（B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ記入すること。）
該当なし	

⑦「第三国所属の研究者」内訳（B型で本事業費で旅費支給の場合のみ。）（5名迄。適宜行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入のこと。）

所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	研究交流に不可欠な理由
該当なし			

⑧相手国のマッチングファンド(=相手国側拠点機関が実際に本研究課題に使用した研究交流経費) （マッチングファンドの種類ごとに一行にまとめ、負担額を記載。適宜、行を加除し、B型で該当ない場合は該当なしと記入すること。）	パターン１または２をプルダウンから選択ください。 （経費負担区分が該当する相手国のみ。）	1	※参考： 日本側研究交流経費	0

支援機関等名	ファンド・プログラム名	日本円換算額（単位：千円）	換算レート日（例:2021/4/12）	相手国通貨名	換算レート（外貨1 単位に相当する円貨額）
Deustsche Forschungsgemeinschaft	Gottfied-Wihelm-Leibniz-Programme	2,197	2021/3/23	USD	109.85
	合計	2,197			

※日本側で独自に用意した資金（学長裁量経費や本事業以外の資金）を相手国側のマッチングファンドとして扱うことはできません。また、振興会と相手国の学術助成機関等との二国間交流事業等における相手国側資金を相手国のマッチングファンドとすることもできません(EPSRC-JSPS Core-to-Core Collaboration Advanced Materialsのように本事業のために相手国の学術助成機関が用意した相手国側資金は相手国側のマッチングファンドとして扱います)。
※相手国側の学術機関独自の資金（基盤的経費を含む）をマッチングファンドとして扱うことはできます。

5. 交流相手国

事業の型　A　型	
①相手国名（和文）	フランス
②拠点機関名（和文および英文）	
和文：コレージュ・ド・フランス 英文：College De France	
③コーディネーター所属部局名・職名・氏名（英文）	Institute of Advanced Japanese Studies,Professor,Jean Noel ROBERT
④協力機関名（和文および英文）（1機関ごとに行を適宜加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）	
和文：ストラスブール大学、東洋言語文化学院 英文：Strasbourg University,INALCO	

⑤参加研究者数内訳(重複カウントしないこと)	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	その他	合計	第三国所属の研究者（内数）
拠点機関	3	0	0	0	0	3	
協力機関・協力研究者	8	1	2	0	0	11	5
合計	11	1	2	0	0	14	

⑥「その他」内訳（該当ない場合は「該当なし」と記入すること。適宜、行を加除すること。）

所属・職名（専門分野）	研究交流での役割（B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ記入すること。）
該当なし	

⑦「第三国所属の研究者」内訳（B型で本事業費で旅費支給の場合のみ。）（5名迄。適宜行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入のこと。）

所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	研究交流に不可欠な理由
該当なし			

⑧相手国のマッチングファンド(=相手国側拠点機関が実際に本研究課題に使用した研究交流経費) （マッチングファンドの種類ごとに一行にまとめ、負担額を記載。適宜、行を加除し、B型で該当ない場合は該当なしと記入すること。）	パターン１または２をプルダウンから選択ください。 （経費負担区分が該当する相手国のみ。）	1	※参考： 日本側研究交流経費	0

支援機関等名	ファンド・プログラム名	日本円換算額（単位：千円）	換算レート日（例:2021/4/12）	相手国通貨名	換算レート（外貨1 単位に相当する円貨額）
College de France Chaire Philologie de la Civilation japonaise Institut des Hautes Etudes Japonaises	Academic consortium for creating the value of religious cultural heritage through text studies	1,968	2021/3/23	EUR	131.26 ☒
	合計	1,968			

※日本側で独自に用意した資金（学長裁量経費や本事業以外の資金）を相手国側のマッチングファンドとして扱うことはできません。また、振興会と相手国の学術助成機関等との二国間交流事業等における相手国側資金を相手国のマッチングファンドとすることもできません(EPSRC-JSPS Core-to-Core Collaboration Advanced Materialsのように本事業のために相手国の学術助成機関が用意した相手国側資金は相手国側のマッチングファンドとして扱います)。
※相手国側の学術機関独自の資金（基盤的経費を含む）をマッチングファンドとして扱うことはできます。

5. 交流相手国

事業の型　A　型	
①相手国名（和文）	ドイツ
②拠点機関名（和文および英文）	
和文：ベルリン自由大学 英文：Free University of Berlin	
③コーディネーター所属部局名・職名・氏名（英文）	Faculty of History,Professor,Jochem KAHL
④協力機関名（和文および英文）（1機関ごとに行を適宜加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入すること。）	
和文：ハイデルベルク大学、ハンブルク大学、オーストリア科学アカデミー 英文：University of Heidelberg、University of Hamburg、Austrian Academy of Science	

⑤参加研究者数内訳(重複カウントしないこと)	教授級以上	助教・准教授等	ポスドク等若手研究者	大学院生	その他	合計	第三国所属の研究者（内数）
拠点機関	3	0	0	0	0	3	
協力機関・協力研究者	7	1	1	0	0	9	4
合計	10	1	1	0	0	12	

⑥「その他」内訳（該当ない場合は「該当なし」と記入すること。適宜、行を加除すること。）

所属・職名（専門分野）	研究交流での役割（B型で、本事業費で旅費支給の場合のみ記入すること。）
該当なし	

⑦「第三国所属の研究者」内訳（B型で本事業費で旅費支給の場合のみ。）（5名迄。適宜行を加除し、該当ない場合は「該当なし」と記入のこと。）

所属機関所在国・所属・職	専門分野	日本側拠点機関へのメリット	研究交流に不可欠な理由
該当なし			

⑧相手国のマッチングファンド(=相手国側拠点機関が実際に本研究課題に使用した研究交流経費) （マッチングファンドの種類ごとに一行にまとめ、負担額を記載。適宜、行を加除し、B型で該当ない場合は該当なしと記入すること。）	パターン１または２をプルダウンから選択ください。 （経費負担区分が該当する相手国のみ。）	1	※参考： 日本側研究交流経費	0

支援機関等名	ファンド・プログラム名	日本円換算額（単位：千円）	換算レート日 (例:2021/4/12)	相手国通貨名	換算レート（外貨1 単位に相当する円貨額）
Egyptlogy Seminar,Freie Universiät Berlin	Sonderforschungsbereich 980	984	2021/3/23	EUR	131.26
	合計	984			

※日本側で独自に用意した資金（学長裁量経費や本事業以外の資金）を相手国側のマッチングファンドとして扱うことはできません。また、振興会と相手国の学術助成機関等との二国間交流事業等における相手国側資金を相手国のマッチングファンドとすることもできません(EPSRC-JSPS Core-to-Core Collaboration Advanced Materialsのように本事業のために相手国の学術助成機関が用意した相手国側資金は相手国側のマッチングファンドとして扱います)。
※相手国側の学術機関独自の資金（基盤的経費を含む）をマッチングファンドとして扱うことはできます。